

研究の目的 ごみの問題がとりあげられて以来、多くの試みがなされ一般の人々にもその重要性が浸透しつつある。そのごみ問題の一解決策として、資源のリサイクルが必要となってきたが、実際にどれだけの人々がリサイクル活動を認識し、活動しているかその実態をとらえることにより、その問題点を明らかにすることが本研究の目的である。

研究の方法 女子大学の学生がいる一般家庭の主婦を対象に、1991年7月アンケート用紙による配布記入調査をおこなった。有効回収数208件であり、調査対象地は全国35都道府県110箇所の自治体にわたっている。

研究の結果 ①現在家庭から出されるごみは、各自治体によって回収されているが、地域によって統一されておらず、様々な方法で行われている。②大きくは可燃ごみ、不燃ごみ、有害ごみ、危険ごみ、粗大ごみ、資源ごみ等に分類され、その組合せで収集されている。しかしその内容も異なる。③資源ごみとして回収している自治体は、110箇所中21箇所である。④多くの自治体が資源ごみとして回収しているのはびん、缶である。⑤11種類の資源ごみについて自治体以外のリサイクル活動の状況をまとめると、古新聞が最も多いが卵のパック容器、プラスチックトレイ、スチール缶はほとんど行われていないのが実状である。⑥約6割の地域でリサイクル活動が行われており、その活動の有無を認識しているものは、ほとんど活動に参加しているが、約半数のものは活動に参加していない。⑦リサイクルの必要性に対する意識は強いが、その活動に対しては比較的消極的である。⑧資源有効利用の市販商品や過剰包装に対する意識は高いが、実際の生活における対応は消極的である。